

# 情報技術の匠

PROFESSIONAL

## 第48回 エレキ開発の匠<sup>たくみ</sup>

### 情熱が集う場所で。

「新人時代、上司に言われたこと。情熱はあるけど、仕事のできない人。情熱はないけど、仕事のできる人。情熱もあって、仕事もできる人。さて、一番いけない人はどれでしょう？ 私は『情熱はあるけれど、仕事のできない人のほうがまだましだ』と思ったんです。でもこれが一番いけないんだよと言われて。あ、これわたしのことかと思って反省しました(笑)」

仕事に早く慣れたい、だから焦る、余計な力が入る。そんな松井を見ての一言だったのだろう。もっとスマートに考えて行動することで彼女は伸びる。なぜならこれだけ情熱を持っているのだからという親心。振り返ってみれば松井の情熱は、よき

先輩、上司との出会いを引き寄せてきた。エレキ設計・開発という仕事を心の底から楽しんで続けることができた。情熱はあるけれど仕事のできない人と自分を評価していたあのころ、将来の自分をイメージすることなどできなかったのかもしれない。

ハードウェア開発者という、子どもころからその素養があって目指してくる者が多い。自身の興味を極めるために、この道を選ぶ。しかし松井にはバックグラウンドがなかった。

「わたしの専門はネットワーク。ソフトウェア寄りでした。ですからエレキのエンジニアとしてやっていくた

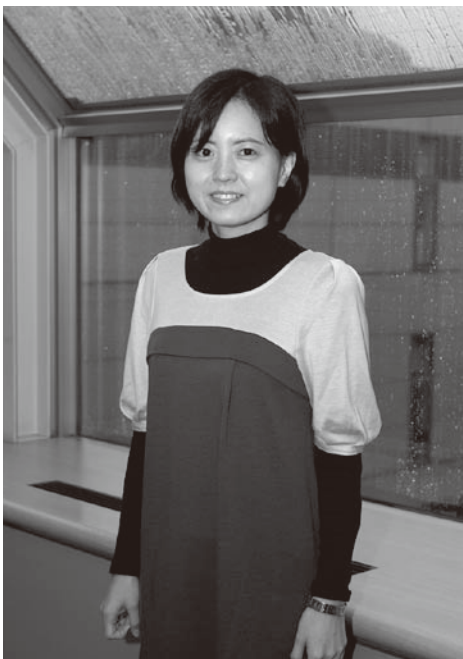
めに必要なツール、それこそオシロスコープとか、はんだごてとかは使ったことがなかった上に、基本となる電子回路から始めなければいけませんでした」

もちろん IBM の仕事としてやるべき軸は、こうした作業ではなく提案活動やプロジェクトマネジメントだ。しかし、その提案やマネジメントは、エンジニアの基礎を理解、共感していなければできない。その現実が松井を苦しめる。

「配属されて初めて作った試作基板を10枚リワークした時、10枚とも動かないんですよ。普通10枚とも動かないと、ロジックの設計ミスだと思うわけです。終電間際までやっていて、みんなでおかしい、おかしいと言いながら。最後に先輩が『もう1回だけはんだごてやってみよう』と。それでピッとやったら『あ、動いた』って(笑)」

この先自分にできるのだろうか？ 普通であれば悩みの中に沈んでしまふところだが、先輩たちがどんどん未知のものを解析し、新しい世界を切り開いていく様を見て、次第にものづくりの世界にひかれていく。

「ハードウェアのもう1つ面白いところは、チームでやること。いろいろな問題は起こるので大変ですが、みんなの情熱、パッションが集結す



#### 松井 彩 (まつい あや)

日本アイ・ビー・エム株式会社  
大和システム開発研究所。  
システムズ・ラボ・  
サービスアンドデベロップメント  
主任

#### 【プロフィール】

1998年入社。エレクトリカル・エンジニアとして、IBM NAS100を皮切りに、画像の高速・高精度圧縮機能などを有したPCIカード(2003年)、血液検査装置用基板(2004年)などを手掛ける。2006年、Cell CPUを使ったCell Workstationを開発後、2007年には組み込み用Cellシステムの開発で開発リーダーを務める。現在産業用Cellの各種開発、コンサルタント業務を担当。2008年、テクニカルマスター認定。2009年、Smarter PlanetのテレビCMに出演。

る時があってそこがやっぱり面白いなって。それに、デバッグ、結構性に合っていたみたいで（笑）」

情熱だけではだめだ、と言われても、その時の松井には情熱しか武器はなかった。だからがむしゃらに先輩の後を追った。時に厳しい言葉をぶつけられても食い下がった。7歳上の先輩、そして2人の14歳上の先輩。この3人が多くの啓示と機会を与えてくれた。

「物を作るという基礎をじっくり教えてもらいました。時には先輩に連れられて、使わなくなったハードウェアの部品が集められている場所に足を運んで物色。このケーブルは裂けば使えるねとか、コネクタも、これを外せば使えるねとか一緒に。14歳上の1人は亡くなってしまったのですが、3人の先輩にはとても感謝しています」

ものづくりの面白さと基本と魂を一緒になって学んできた。先輩からの数々の言葉。

「プロジェクトに恵まれなかったって、組織にお金がなくなっちゃってやり方は幾らでもある。提案していこう。アイデアが勝負だ」

「ツールが使える、作れる。そこに価値があるわけじゃない。そんなのは誰でもできる。だけど、それを知っていて、使えてアイデアを出せるのと、そうじゃないのとでは全然違う」

こうした言葉が、自分を前へ向かせてくれた。そう、情熱だけでは…と言っていた先輩たちも情熱に動かされてきた者たちだった。情熱のメンバーに松井も加えられたのだ。

「挫折していた時期もありました。エレキを続けていく機会が減っ

てきて、IBMを辞めてほかの仕事をやろうと思っていた時期もあります。でも、この会社って面白いなと思うのは、情熱がどんどん集まってくるところ。そしてやる気がある人には好機が来る。そういうところがすごくいい会社だなと思っていて…結局12年がたちました」

現在手掛けているCellシステムでのプロジェクト。ポープリンゲン(ドイツ)、ロチェスター(米国)、オースチン(米国)、日本、そしてCellにつながるI/Oブリッジを担当するハイファ(イスラエル)の世界5カ所が進められているが、複雑なハードウェアの機構を持つために、各国の担当者と連携することが必要だ。ここに松井のいう情熱が集まっている。

「高度なものだけではなく、とてもプリミティブなことまで。自分の範囲外のことでリモートでチャットに入ってきてくれて、どんどんディスカッションに加わってくれる。時にはデバッグを手伝ってくれたり。なんでこんなことしてくれるの?と思うくらい助けてくださる。もう何度も何度も彼らのおかげで危機を助けてもらっています。こういうことって、本当に面白いし、これこそがこの会社のすごさかなと思います」

情熱の集合体は先輩だけではなく、ワールドワイドのメンバーも同じだった。

「みんな純粋なエンジニアなんです。いいものを作りたい、問題は残したくない、気になるところは一緒に解決したい…」

遅れてきたエンジニアだったかもしれないが、今では根っからのエンジニア。

「なかなか解けない問題があっても、自分だけは最後まで逃げないというのが根底にあって。ダメだとあきらめムードになっていても、自分だけは最後まで責任を取ろうというのがあります。最後まで見届けたいというか、最後まで逃げたくない。最悪の局面に最後までいたい」

亡くなった先輩からはこんな言葉ももらった。「そんな頑固おやじみたいなことを言うな」。松井のひた向きさにあきれたのか、それとも感心したのか。

「（笑）意地ですね。お客様には最後まで責任を果たそうという思い。そこで逃げたくない。ただの意地っ張りなんだとは思っていますが」

松井は言葉にはしなかったが「でもそれは、亡くなった先輩もワールドワイドのエンジニアも一緒。だからわたしも頑張れる」と言いたかったのかもしれない。やはりここは、情熱が集まる場所なのだ。



「頑固おやじ」に最後に聞いてみた。「疲れませんか?」と。苦笑して松井は答える。

「疲れますよ。周りも疲れるみたいですけど。でも仕事だけです。普段はパツとしない、何も無い人です。大学時代はミーハーだったのですが、あ、洋服ははやりものを買っています（笑）」

昔ほどがむしゃらではない。前へ進もうとする情熱は責任感に代わった。でもそれも自然体。情熱は無理に起こすものではなく、自然に出てくるもの。それが、エンジニアという存在であり、松井なのである。